

RC-19 「まちづくり・地域づくりにおける歴史文化遺産の活用～史跡を中心に～」

課題提案者：盛岡市教育委員会歴史文化課、研究代表者：総合政策学部 教授 倉原宗孝
 研究メンバー：今野公顕（盛岡市教育委員会）、吉田栄（志波城跡愛護協会）、菅原吉男（本宮地域協働協議会）、
 藤村幸雄（街づくり集団ゆいネット盛岡）、佐々木一弥（太田地区自治会協議会）

<要旨>

盛岡市内には、縄文時代から近世にいたる各種史跡（遺跡）が良好に保存されており、盛岡の歴史を語る上で欠かせない重要な財産となっている。これらは「観光資源」としていっそう活用できるばかりでなく、地域の環境資源として盛岡の地域づくり・まちづくりの中核としての役割を担うことが期待される。しかし、これまでこの「活用して社会に役立てる」という視点において具体的な研究や施策が十分ではなく、市民の認知度は必ずしも高いとは言えない。そこで本研究では、市民協働という考え方に立脚した新たな視点での幅広い活用策等について、アンケートやヒヤリング調査、地域住民との懇談会などを通じて、史跡・文化財を活かしたモデルケースの構築に向かった。

1 研究の目的と方法

盛岡市内には、縄文時代の県指定史跡「大館町遺跡」、平安時代の国指定史跡「志波城跡」、中世戦国時代の「安倍館遺跡」、近世の国指定史跡「盛岡城跡」をはじめ、各時代の重要な史跡が存在する。こうした史跡に対する市民の認識把握、活用検討等の為のアンケート調査を行った。

また各史跡の中でも最も重要な一つである「志波城跡」について、関係者へのヒヤリング、住民や関係者に対する活用方策の提案などを行った。これらを通じて市民協働による史跡の保存・活用に向けたモデル構築に向かうことを狙った。

2 盛岡市の史跡に関するアンケート調査

史跡保存・活用を促すため盛岡市各史跡に対する市民の認識・意識等を探るアンケート調査を行った。大学実習の受講生の協力を得て、平成24年12月7日より約一週間、盛岡駅、もりおか歴史資料館、一ノ倉邸にてインタビュー形式で行い、計260件の回答を得た。

設問内容は、史跡に対するイメージ、盛岡の歴史に対する興味、同じく遺跡に対する興味、具体的な主要文化財の認知度、訪問経験、（また後に記す）志波城跡に対する認識（築城者、現状認識、要望等）、キャラクター・しわまるくんの認知度、盛岡市の文化行政に対する要望等、である。

以下、設問から見る代表的な傾向の幾つかを記す。歴

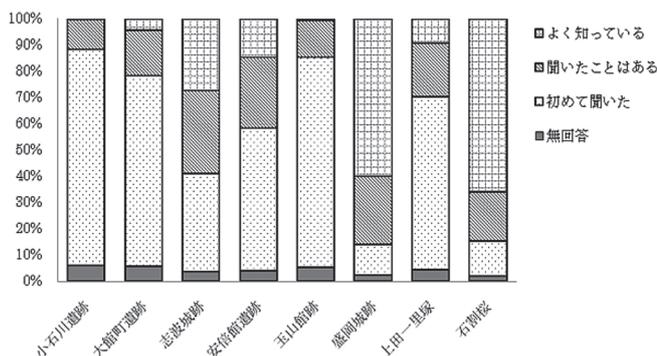


図1 各遺跡等の認知度 (N=260)

史や史跡を大事にしたい、知りたいという気持ちは高いものの、その実態に対する認知度は低い。各種史跡と触れあう機会をより仕掛けることで、史跡の活用可能性は高まると思われる。また志波城跡に対して、認知度は高いとは言えないようだ（よく知っている27%、聞いたことはある32%、初めて聞いた37%）。また訪問経験についても少ないと判断される（行ったことがある20%、見かけたことがある18%、行ったことも見たこともない57%）。志波城跡は中心街から少し離れ、交通の便など現状では有利とは言えないが、まず知ってもらう工夫、来てもらう工夫が必要となろう。そのことへ地元住民と行政により各種イベントなどの取り組みが成されているが、さらに興味・関わりを促す緩やかな広がりを今後仕掛けていく必要がある。

また市に対する要望では、教育面での積極的な取り上げ（19%）、他地域へのアピール（19%）、もっと豊富な文化財の紹介（18%）、活用したイベント開催（18%）などが多かった。

今回の調査は本格調査への実験的なもので調査対象の枠組みなどラフな形で行ったが、歴史や史跡に対する興味や関心は一定程度あるものの利用が十分ではなく、今後の取り組みにより市民の文化享受と文化財保存の双方を高める方策の可能性が伺えた。

3 志波城跡の保存・活用に向けた提案・検討

(1) 地元関係者へのヒヤリング

盛岡市の重要史跡の一つである志波城跡を対象にして、その保存・活用の方策を探ると共に地元住民・関係者・行政等の協働による今後の取り組みの機運を高めるために、関係者へのヒヤリングや検討会を企画実践した。

ヒヤリングにおいては、地元で中心的に保存活動に関わる愛護協会や祭り実行委員会などの6名の関係者に対してお話を伺った。

地元の動きとしてはまだ始まったばかりだが、関係住民の協力体制があり、第一回のお祭りの様子など今後への力強い手応えが感じられている。こうした人的協力体制は一定程度あるものの、設備など資金面の課題はあるようだ。

ただし復元のための整備や農業の近代化にも伴って、かつて機能していた「結い」や近所の絆が弱くなっていることも指摘されている。一方で、志波城跡に対する愛着は強く、特にお年寄りにとって大きいようだ。その中で、「古代学校」など子ども達を巻き込んだ取り組みが楽しみでもあり、今後への期待と共に活用を模索する機会にもなっている。また世界遺産登録などへの期待も持たれている。

(2) 志波城活用に向けた提案と検討会

大学調査実習の場も借りながら、大学生による志波城跡の保存活用に向けた調査と提案作成が行われた。またその成果を地元住民・関係者と共有、検討する中で、今後の協働による保存・活用に向けた気運を高めようと検討会を設けた。

検討会当日は予想以上の住民関係者が参加された（住民関係者、市関係者、32名）。その中で、志波城跡のこれまでの経緯を振り返り、先のアンケート調査の概要報告を行った。その後、大学生による志波城跡の活用提案が行われた。

大学生からの提案は4グループから、独自の空間や食材を活かした「古代カフェ」、小学生の志波城をテーマにした劇、史跡巡りツアーといった観光、今日のゆるキャラブームを踏まえて当地の伝説から創作した「はとまるくん」の提案があった。いずれもユニークで示唆に富むもので会場からも好意的な評価が沢山あった。

これらを受けて地元住民関係者との意見交換が行われた。蝦夷の歴史を大事にしたい、志波城を中心とした地域の歴史を学ぶきっかけを作りたいといったこと、地域の歴史に対する関心やそれを広げていく意欲が触発されていたようだ。また学生の提案から、古代米の活用などに共感すると共に、現在取り組んでいる田んぼアートの展開、さらに面白いことをやっていける自信なども聞かれた。同時に制度面、技術面など史跡ならではの苦労も共有された。これらを通じて、地道に無理なくではあるが、行政・専門家からの支援も受けつつ、地元主体でさらに積極的に志波城跡の保存・活用に取り組んでいこうとする機運が高まっていた。



検討会当日は予想以上に沢山の住民関係者の参加があり、地元の関心がかかる。検討の場では、住民から非常に積極的な感想や意見が出された。また本研究の地域還元なども期待され、具体的な活動と共に、史跡の保全活用、市民協働といった研究テーマからも有効であり、引き続き調査・活動を続けていきたい。

4 今後の具体的な展開

市内にある各史跡の潜在的活用価値は大きい。教育、観光など各分野での活用を仕掛ける必要がある。そこには経済的な課題が大きいのが、知ってもらうこと、触れてもらうこと等、気軽な取り組みから大きな活用効果が期待される面があるようだ。これらの緩やかな仕掛けがさらに求められよう。その代表でもある志波城跡は、今後の史跡の保全活用のモデルにもなり得る期待がある。同時にそこでの市民・行政による協働作業の経験は他のまちづくり・地域づくりに普遍化されるものともなろう。今回は単年度の調査研究であったが、継続的な活動の中でこれらは形を成す物である。保存活用と共に、地域住民をはじめ行政等各主体の協働関係を促進する立場としても引き続き活動に取り組んでいきたい。

5 その他（参考文献・謝辞等）

地元住民の方々をはじめ関係者に大変お世話になった。また実習の大学生にも大きな貢献をしてもらった。本研究の一部は佐藤彩香さん（平成24年度卒業生）にも協力頂いた。皆さまに記して感謝の意を表したい。



パワーポイント等で発表された大学生の提案は非常にユニークで地元関係者からも共感された。伝説にちなんだ「はとまるくん」（写真上）や古の空間・材料を活用した「古代カフェ」（写真中）など、地元関係者の「やってみようか」という意欲を高めたようだ。

